



花子

とよ子

たのしみに待まちにまつて居をた夏なつのお休やすみになりましたので私わたしは毎日まいにちくお庭にはに出てはうつくしい孔く雀じつ草そうや。松まつ葉はぼたんなどの花はなに水みづをやつたり金魚きんぎょやヒヨツコに餌えをやるのを何なによりたのしみにして居をます。が時とき々ときまりが。花壇くわだんやお池いけへころがりこんで。花はなや金魚きんぎょをびつくりさせる事ことはありますが其そ他たのおいたはちつともしないつもり。私わたしはも少しねると幼おと稚ち園えんを卒そつ業げつするのですもの。けふは朝あさからむしあつくお母おさんあも姉ねえさんえも額ひたのたわきへ紙かみをはつて八はちの字じよせては頭あたまがいたいくといつていらつしやる。私わたしはなんともないのでお家いのうち内の

遊びにあきましたから一つお庭へ出で涼しい藤棚の下にでも行つて。菫をつきませうと。とんで行きました。箒でどろをきれいにはき

一二三四おみよの景色をお春とながめてホーホケキヨ〜鶯やく〜と一生懸命上手に歌つてつひて居ますとどこかで

ではいつておいで。けれどもいくら暑くても決して金魚の眞似してお池の水へ入つてはいけませんよい、かい

と優しい聲がします。私は不思議でたまりません。丁度お母様が私におつしやるやうな御言葉ですもの。だれがあんな事いつたのかしらと。方々見廻しますと

一匹の大きいまい〜つぶろと一つの小さい子供のまい〜つぶろとが垣根に止つて居りました。やがて小さいまい〜つぶろは。ひよろ／＼しながら飛石傳にお庭の向ふへと遊びに行くのです今のはお母さんのまい〜つぶろが心配してよくいひ聞かせて居た御言葉でしたのですのね私は菫の事など忘れてしまひ。子供まい〜つぶろがどこへ行くのか一つ見ませうとそろ／＼と後をつい

て行ききました。すると子まいくつぶろはさもくうれしそうに

あゝ漸く廣々した處へこられたお母さんはなせあんなにやかましいのだらふ  
 此暑いのにあんな狭つくるしい處に居られやしない金魚だつて蝶々だつて皆  
 てんでに方々へ遊びに行くのに私許りどこへも行かれずほんとなつまらな  
 かつた。けれどもけふは一つ獨りで遠くへ遊びに行つて來ませう。けれど此背  
 中の家が邪魔になるな

なんて長々と獨言しながら御池の測へと行きますので私はおちてくれなければ  
 いゝが。あぶないくと思ひながら見て居りました。敷石のはちがら滑り落ち  
 そうにしたり小石につまづいたりしながらいよく御池のふちの石へとはいつ  
 ききました。何か云つて居るやうですからよく聞けば

あゝくやつとこゝ迄來たなる程お母さんのいつも云はれる通り中々たぶ  
 れるわい。けれども又何といふ景色。おやあそこに美しい金魚が居るあつひ  
 つこんだ。又こつちへ浮いた。あゝ面白そうだ事。おやく大きい鯉も居る

あら龜の子さんも今一寸見えた。あゝ、みんなは冷たい水の中にたのしく  
 氷いで居て。汗なんてかく事はないだらふ。僕も此迄せつせと歩いて來たの  
 で汗びつしよりになつた一つ水行水でも使つてさつぱりしたいものだ。どれ  
 ぐ一つ此家をこゝ置いて

と云つて家をぬき捨て乍ら

あゝ之で輕くなつた之でよし

などと喜び乍ら二本の角をさもうれしそうにふり立て、だんぐ水の中の方へ  
 と行きますから私は心配でたまりませんでした。先程から急に曇つて居ました  
 が。にわか雨がどつと降りだしましたのでいそいで御家へ入り雨のやむのを  
 まつて又行つて見ました處が。金魚や。鯉は皆岩の下へかくれて居たと見え平氣  
 で水のふつたのをさもよろこばしきうに氷いて居ましたが可愛憎にさつきのま  
 いぐつぶろはとうぐ水に溺れて死んで居りました。大きいまいぐつぶろ  
 が定めし心配して居るでしやうと可愛憎になりましたからいそいでお母さんや

姉さんねえに此お話をこのお話ししましたらお母さんかあか

まいくつぶろ許りゆるではなく。どなたでもお父さんとうやお母さんかあやお姉さんねえのおい、つけにそむくとそう云ふ目めにあいますよ

とおつしやいました私わたしもほんとうにそうと思ひおもましたから之これからは今迄いままでよりもつとよくおい、つけを守らふと思ひおも。お母さんかあにそう申まをしました。お母さんかあは花子はなこはよい子こよくそう云ふ事ことに氣きがつかましたね

とおつしやつて可愛人形あいにんぎやうを下くださいました。學校がくかうが始はじまつたら皆様みなさまにも此お話しこのお話しして上げて皆みなよく云ふ事ことをきくお子こになるやうにしませう。

仲なかよし

ある家の仲なかのよい猫ねことカナリヤとが旅立たびだちしました。カナリヤは猫ねこの背せに上のりてたのしく参まゐります中に日ひが暮くれましたので。森もりに一夜ひとやをあかす事ことにし猫ねこは樹きの下したで洞穴ほらあなの中なかに入はいつて眠ねむり。かなりやは高い枝えだに飛とひ上あがつて眠ねむり始はじめました。つかれにくくよく眠ねむりましたがカナリヤがふと目めをさしますともう太陽たいやうが

さら／＼東の山を離れ涼しい朝風がそよ／＼吹きますので何とも云へず楽しく  
二聲三聲高く囀りました。それを聞つけた木鼠は

「おや／＼けさは何と云ふいゝ朝だらふ早く取つて皆でたべませうさあわたし  
は此枝から行く。お前はこゝらからお出」

と大騒ぎして今にも飛で行かふとします。猫はあまりの騒がしさにふと目をさ  
ましますと。何も知らぬカナリヤはさもうれしそくに歌つて居ますので大事の  
友達の命を取られてはと。日頃とぎにといだ爪をむき出し馳け昇つて皆鼠を食  
べてしまいました。そして又カナリヤと二人毎日たのしい旅をしました。心な  
い獣でもお友達とは仲よくしますとさ。めでたし。